

琉歌集諸本について

清水 彰

(武庫川女子大学文学部国文学科)

On the texts of Ryuka

Akira Simizu

Department of Japanese

Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663

琉歌集のテキストとして、現在、最も広く通行しているのは、島袋盛敏・翁長俊郎編『標音／評訳／琉歌全集』（武蔵野書院、1968）であろう。これは、もと、島袋盛敏編『琉歌大観』（沖縄タイムス、1964）に音標記号を加えたもので、所載の歌は完全に両者一致している。

そのほか、活字本としては『南島歌謡大成Ⅰ』（角川書店、昭和55年）や『日本庶民生活史料集成』第19巻（三一書房、1955年）・『南島文学』（鑑賞日本古典文学、角川書店、昭和51年）などが比較的知られていると思われるが、これらは、おおむね『大観』（『琉歌大観』の意、以下同じ）・『全集』（『琉歌全集』の意、以下同じ）所載以外の琉歌は載せていない。

私は数年前、自分の研究の必要から『全集』の総索引を作成し、それを武蔵野書院から『標音／校注／琉歌全集総索引』として刊行した。その際、手持ちの対校本二三種（後述）を用いたが、それらにも少数ながら前述の諸本には見えない歌の所在を認めた。その前いつのことであったかは失念したが、法政大学沖縄文化研究所をたずねた時、かなりの数の琉歌集のコピー本を見せていただいていたので、『大観』の底本を註索してみたい好奇心が起こると同時に、対校本として用いた、『琉歌百控』『古今琉歌集』との間に認められた若干の異動も気になり、かたがた前両書にもれている琉歌を探索してみたい欲求にかられて、昭和52年ごろから琉歌集の収集を始めたのであった。

そして、現在手元に集めた琉歌集は、前記したものをのぞくと、いずれもコピー本やマイクロ紙焼本ばかりであるが、下記のとおりである。なお、写本等については、識別のため私に仮称を与え、[] 内に略称を記す。

- | | |
|------------------------------------|------|
| (1) 琉歌大観 島袋盛敏、沖縄タイムス社、1964年 | [大] |
| (2) 琉歌全集 島袋盛敏・翁長俊郎 武蔵野書院、昭和43年 | [全] |
| (3) 古今琉歌集（再版） 富川盛陸、丸三活版所、明治44年 | [古] |
| (4) 新撰琉歌集 大城松吉、松屋活版所、大正7年 | [新] |
| (5) 朝春本琉歌集 写本、琉球大学図書館蔵 | [朝] |
| (6) 琉歌註釈 喜納緑村、琉球研究社、昭和7年 | [註] |
| (7) 当智本琉歌集 写本、琉球大学図書館蔵、1874年 | [当] |
| (8) 博物館本琉歌集 山城正栄、写本、沖縄県立博物館蔵 | [博] |
| (9) 若樹文庫本琉歌集 写本、原本所在不明 | [若] |
| (10) 宮平本琉歌節組 写本、原本所在不詳 | [宮平] |
| (11) 琉球大歌集 小橋川朝昇、写本、琉球大学図書館蔵、1829年 | [大歌] |
| (12) 琉歌百控 写本、琉球大学図書館蔵 | [百] |
| (13) 琉歌歌曲 写本、琉球大学図書館蔵 | [歌] |
| (14) 宮里本琉古歌集 宮里某、写本、原本所在不明 | [宮里] |

- | | |
|----------------------------------|------|
| 15) 天理本琉歌集 写本、天理図書館蔵 | [天] |
| 16) 狂戯いろは詩歌 榕蔭痴翁、写本、琉大図書館蔵、1859年 | [狂] |
| 17) 琉歌疑問録 写本、琉球大学図書館蔵、明治33年 | [疑] |
| 18) 沖繩声曲集 写本、東京分理科大旧蔵、原本所在不明 | [声] |
| 19) 伊波本琉歌集甲本 写本、琉球大学伊波文庫蔵 | [伊甲] |
| 20) 伊波本琉歌集乙本 伊波普猷写か、写本、同上蔵 | [伊乙] |
| 21) 伊波本琉歌集丙本 筆写者同上、写本、同上蔵 | [伊丙] |
| 22) 作者別本琉歌集 筆写者同上、写本、同上蔵 | [作] |
| 23) 部位本琉歌集甲本 筆写者同上、写本、同上蔵 | [部甲] |
| 24) 部位本琉歌集乙本 筆写者同上、写本、同上蔵 | [部乙] |
| 25) 大湾本琉歌集 大湾政通、マイクロ紙焼本、原本所在不明 | [大湾] |
| 26) 仲宗根本琉歌集 仲宗根玄純、写本、平良市中野家蔵 | [仲] |
| 27) 豊川本琉歌集 豊川善包撮影か、マイクロ紙焼本、原本不明 | [豊] |
| 28) 善祐本琉歌集 新川善祐、写本、琉球大学図書館蔵 | [善] |
| 29) 琉歌千集 松田清永、コロタイプ社、一九七一年 | [千] |
| 30) 屋嘉比朝寄、写本、琉球大学図書館蔵 | [工] |
| 31) 疱瘡歌 写本、同上蔵 | [疱] |

以上の諸本のうちには、相当に破損のはなはだしいものがあり、特に最後の [疱] などは、破損の裏うちを新聞紙でしてあるため、原本でさえ判読が困難であり、ましてコピー本では、とうてい判読することができない。その他にも、例えば [伊甲] [善] などの原本には、ページをめくることができないくらいに破損が進んでいるし、判読に困難をおぼえる程度に破損の進んだ本が何種かある。

これらを編纂形態から分類すると、次のごとくである。

- A 節組本 琉歌の発生についてはいまだに不明の点が多いが、少なくともその初期の隆盛期にあっては、中国からの冊封使歓迎の宴席音曲の歌詞として発達したとみられることと関係して、曲節とともに伝えられているものが多い。そのため、歌詞を曲節によって分類配列したものが多くある。この編纂形態をとるものを総称して「節組本」と仮称し、それ以外のものを「非節組本」とする。

この組の本は大部分口説を含み、多くは巻末部にそれを配している。曲節名の表記法は本により必ずしも一致しないが、それは単に表記法上の相違にすぎないとみられる。ただ [百] だけは三部構成をとっていて、各部内の曲節配列も他の節組本のそれとは異なっている。収載する歌もこの類の本すべてに共通のものが多く、他の本に見えない独自歌を載せる場合も、その数はさして多くない。作者名を注記する本もあるが、その多くは筆写者の記憶にあるもののみを注記したにすぎないのではないかと思われる程度の注記のものが多い。

以上の点から推察するに、この類の本に含まれる歌には、比較的古い歌が多いのではないかとと思われる。

この類の本としては、次の諸本をあげることができる。

- [朝] [註] [当] [博] [若] [宮平] [百] [歌] [声] [伊甲] [伊乙] [大湾] [仲] [豊] [善] [工]

- B 部立本 勅撰和歌集の部立に似た編纂形態をとるもので、多くは四季の部・恋の部と雑の部とに分ける。この類に属するものは、[古] [新] [部甲] [部乙] の四本であるが、[新] のみには上記の部立の他に「遊女を読める歌」としてかなり数多くの狂歌めいた歌を載せる。なお、[古] [新] は、一部の歌に曲節名を注記する。

[部乙] を除いては、すべて作者を明記する。それによると、明治時代の人名がかなり多く見えており、節組本にくらべて新しい歌が多数含まれていることが分かる。前記の「遊女を読める歌」の部では、作者名がふざけたペンネームで表記されており、それらの人の本名が明らかになれば、多分ある程度有名な作者なのであると思われるが、残念ながら、それを解き明かす手掛かりは今

のところ持っていない。

C 節組部混合本 [大][全][大歌]の三本がこれに属する。

この類の本は、前半が節組、後半が部立による編纂形態をとるものである。ただ、[大歌]は「各節本歌」として各曲節ごとに原則として一首の歌を挙げ、その後に「狂歌」の部を設けている。

[大]と[全]は、前述のように所載歌は全く同じであるので、一括して述べる。

前半の節組の部は、他の節組本とおおむね同じであるが、口説を全く含まないし、他の節組本に見えてこれには見えない曲節も少なからずある。それらの曲節の歌詞は、八六調を主体とする琉歌のリズムからは、かなりずれているといえる。

余談になるが、琉歌を定義しようとすれば、かなりむずかしい問題が介在してくる。多くの琉歌集には口説が含まれているので、広く言えば、当然口説も琉歌に含めて考えるべきであろう。しかし、七五調で長い一種の物語り調子をもつ口説は、歌というよりは、むしろ語りというべく、普通の琉歌との間には大きな違いが存するように思われる。また、石根の道節などのように、何調といてよいかリズムのよくわからないものの場合、これをどう扱うべきかは問題の存するところであるが、こういう問題を伴うのは曲節をもつ歌に限られるので、当面、[大][全]に載せる範囲に含まれるものを琉歌として扱うことにしたい。

現在までに管見に入った琉歌集のうち、この両書が最も多くの歌を収載し、その数は3000首にのぼる。したがって、この両書の収載歌は、大部分、他の伝本のいずれかにも出ている。しかし、それにもかかわらず、本書にしか見えない歌も少なからず認められる。ということは、『大観』『全集』が底本として用いた本で、管見に入っていない伝本がまだあるということであるから、今後さらにその探索に意をもちて行きたい。

閑話休題、後半は「吟詠の部」として部立編成になっているが、その部立は他の部立体より分類がこまかく、雑の部が羈旅・哀傷・教訓などに細分されている。

D 作者別本 文字通り作者別に編集配列した本である。これは[作]一本のみである。ほぼ時代順に作者を配列し、王族を巻末近くにまとめ、巻末には和歌を数十首添えてある。ただ、王族のブロックのすぐ前には、古代からの伝承歌といってよい、作者不明の古歌を数首置いている。

登載する歌人は百名余りで、王・王妃をはじめ、庶民や遊女に及び、時代的にはほぼ琉球王朝最末期の人を下限としている。

E 雑纂本 仮に雑纂本と名付けたが、中にはそう名付けるに必ずしも適切でないものもある。要するに、この類に入れたものは、上述のどの類にも入れることのできないもので、それぞれ独自の内容や形態を持っているので、個別に説明を加えることとする。

「天」は、文字通りの雑纂本である。すなわち、巻頭部分は[百]の冒頭部分の写本であり、他の部分も、例えば尚敬王国内巡幸の際随行した与那原親方良矩の歌、故津波古親雲上の歌など、幾つかの歌群から構成されている。おそらく、元来は別になっていた複数の本を合成させて成った本と思われる。

この本は『国書絵目録』に『琉歌百控』として登載されている本であるが、それは、この冒頭部分を書名と誤解しての誤りである。

[宮里]も、もとは二三種であった本の合成本であると思われる。というのは、前半は一首二行書き、後半末尾近くまで一行書きで、巻末の数葉は再び二行書きになっており、それぞれのブロック同士に重複する歌が少なからず認められるからである。

[狂]と[千]とはどちらも、いろは順の配列になっている点が共通している。異なっているのは、前者が自作の歌集であり、後者が古歌の集成本と認められる点である。

[狂]は、儒教的色彩の濃い作者自作の琉歌をいろは順に二首ずつ並べ、下段には上段の琉歌に見合う五言の漢詩句二聯を配してある。

[千]は、その序文によると、編者の記憶に残る琉歌を千首集めて、それをいろは順に配列したものである。大部分は上記の諸本に収載されている歌と重複するが、記憶に頼ったのみであるせい

か、歌詞の異動が散見される。ただ、他の諸本に見えない独自歌も数多く含んでおり、その点、ある意味で貴重な本といえる。

〔痲〕は、文字通り天然痘の流行を恐れた庶民が、痘瘡の神をなごめる目的を以て、病状の軽きを礼賛した歌を集めたものである。その多くは〔大〕〔全〕に収載されている。

上記の諸本のうちには挙げてなかったが、この類に入れることのできるものの一つに『戊申琉歌会』という本がある。これは、上江洲由具という作者を選者として、同好の士が結成した団体の歌会の記録である。兼題や席題による詠草を、選者が添削し加点したものの約二年間にわたる記録である。そのうちの入選作の一部は、『沖繩毎日新聞』の明治44年から同45年にわたって再録されている。その再録作品を原本と比較してみると、選者の改作に等しい添削後の作品が原作者名で出ていたりして、この本を通常の琉歌集と認めることがためらわれるので、上記諸本のうちに列記することをさし控えた。なお、選者由具の詠草で、上記諸本に採録されたものも少なくない。

以上は、主として編纂形態による分類であるが、独自歌をどれだけ含むかという観点からみることもできる。伝承歌的性格のつよい節組歌の場合、歌詞本文の微妙な異動が多く、どこまでを本文異動と考え、どれくらいであれば別の歌とみなすかは、まことに困難な判断を要求する問題である。それは、単に節組歌のみにとどまらず、いわゆる吟詠の部に属する歌の中には、たまたま曲節付きで歌われなかったというだけで、伝承的性格という点では、節組歌と変わらないものもあろうから、一概にいうことはできないが、吟詠歌の多くは、文芸的創作意識をもって作られたはずと思われるのに、伝承歌の換骨奪胎めいた作品も少なからず、同一歌か別歌かの識別は、いっそう困難さを加えることになる。まして、琉歌集はいずれも、厳密なテキストクリティークを経たものはないといってよく、加えて、筆写者や編者の記憶違いや恣意が介在していることは、じゅうぶん想像されるところであるから、本文の異動を問題にすること自体、ナンセンスといわばいえなくもない。しかし、琉歌を研究対象として扱う場合、そこに何らかの基準を設けて判断を下さざるをえない。今ここでその基準を論じる余裕はないが、私は私なりの判断基準をもってその識別にあたったところ、手持ちの資料に約5000首の琉歌を識別することができた。

それをその所収本について調査してみると、節組本所収歌は、所収本が重複することが多い。それも、この類の本のほとんど、又は、すべてに所収のものから、二本にのみ共通のものまで重複状況はさまざまであるが、一本のみの独自所収歌はそんなに多くない。それでも、節組類の本の数がかなりにのぼるから、仮に一本に平均5首あったとして、合計約100首にのぼる勘定になる。実際はもう少し多いように思われる。

部立本と作者別本とは共通する歌が多い。そして、節組本所収歌が、部類別とか作者別とかの観点でこれらの本に載せられることもあるから、これらの類の本にも独自歌はそれほど多くないといってよい。そして、C類本は、A類本とB類本の混合形態であるから、それらの所収歌と大部分が共通していることになる。その点でいえば、独自歌は節組本・部立本・作者別本の各類には比較的少なく、雑纂本に多いといえることができる。

事実、〔狂〕は編者の自作歌集であることもあって、他本にも見える歌は一つもない。また、〔天〕の尚敬王巡幸の随行歌も他本との重出歌はほとんどなく、故津波古親雲上作の歌群も、この津波古親雲上という人名は本書以外には所見がなく、その作品も見えていない。〔宮里〕にも独自歌はかなり多い。

さきに、節組本類の曲節名配列は大同小異であるといったが、各歌についてみれば、同一の歌が、本によりまったく別の曲節のもとに配列されていることは、きわめてしばしばあることであり、歌の配列順は本によってさまざまである。その中で、〔朝〕と〔註〕とは歌の配列がほとんど同じであり、この両者は同系統本であると認めてよいと思われる。詳細な調査検討が必要であるが、おそらく〔註〕は〔朝〕を底本として著作されたものと推定される。また、〔当〕・〔博〕・〔若〕三者の間にも歌配列に類似点が多く認められ、これらも互いに何らかの関係をもっていると考えられる。同様の関係は、〔大湾〕・〔仲〕・〔豊〕の間にも存在が想定される。

節組部立混合本でも、〔新〕の「遊女を読める歌」の群を除けば、歌の配列は〔古〕と〔新〕とまったく同じといってよく、〔新〕は〔古〕を底本として、それに若干の加除を施したうえで、「遊女歌」の一群を追加した

琉歌集諸本について（清水）

のであろうという、その成立経緯も推察されるのである。

以上、現在までに手元に収集しえた琉歌集の諸本（その大部分は本学図書館所蔵、一部は架蔵）について、ごく概略のみを解説し、若干の考察を加えたが、紙幅の都合もあり、不十分の謗りは免れえないかと思う。いずれ他の機会に詳細を期したい。

（1989年9月21日受理）